

②国際協力・交流等に関する事業一覧

| プロジェクト名 | 担当部門 | 頁 |
|--|--------------|----|
| 在外日本古美術品保存修復協力事業（修04） | 保存修復科学センター | 43 |
| 文化財保存施策の国際的研究（セ01） | 文化遺産国際協力センター | 44 |
| アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究（セ02） | 文化遺産国際協力センター | 46 |
| 龍門石窟の保存修復に関する調査研究 陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究（セ03） | 文化遺産国際協力センター | 47 |
| 敦煌壁画の保護に関する共同研究（セ04） | 文化遺産国際協力センター | 49 |
| 西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業（セ05） | 文化遺産国際協力センター | 50 |
| 諸外国の文化財保存修復専門家養成（セ06） | 文化遺産国際協力センター | 52 |

在外日本古美術品保存修復協力事業 (②修04-08-3/5)

目 的

海外の美術館、博物館が所蔵する評価の高い作品の修復に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と共同で、保存修復に関連する研究を行う事業である。平成3年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、平成9年度から工芸品など欧米の修復技術で修復の困難な分野にも協力対象を拡げた。

本事業では立案のために、欧米の美術館、博物館にて作品調査のほかに修復技術に関する討議を行い、併せて輸送手続きに関する協議を行っている。また、修復内容の検討、修復作品の写真記録の作成および整理・保存、輸送手続きに責任を持って当たっている。

この修復協力事業が契機となって、国内外で所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、日本古美術品を所蔵する博物館の間でネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し効果をあげている。

概 要

平成20年度は、10館10点の作品(絵画5点、工芸品5点)を修復した。うち工芸品1点が19年度からの継続、2点(絵画1点、工芸品1点が海外での修復(◆印。このうち絵画1点は2年計画の1年目))。

〈絵画〉

| | | |
|--------------------|---------|--------------------|
| (1) 「松に孔雀図屏風」 | 6 曲 1 隻 | グレーター・ビクトリア美術館 |
| (2) 「星曼荼羅図」 | 1 幅 | バンクーバー美術館 |
| (3) 「虫歌合絵巻」 | 1 巻 | ローマ国立東洋美術館 |
| (4) 「遊女立姿図」(宮川長春筆) | 1 面 | キョッソーネ東洋美術館 |
| (5) ◆ 「達磨図」 | 1 幅 | ケルン東洋美術館(2年計画の1年目) |

〈工芸品〉

| | | |
|--------------------|-----|---------------------------|
| (1) 「住吉蒔絵文台」 | 1 基 | ヴィクトリア&アルバート美術館 |
| (2) 「花鳥紋章蒔絵楯」 | 1 基 | アシュモリアン美術館 |
| (3) 「近江八景蒔絵香棚」 | 1 対 | 市立ヴェルケ・メディジチ博物館(2年計画の1年目) |
| (4) 「楼閣山水蒔絵箱」 | 1 合 | オーストリー応用美術博物館(2年計画の2年目) |
| (5) ◆ 「花樹鳥獣蒔絵螺鈿洋櫃」 | 1 基 | ケルン東洋美術館(3年計画の3年目) |

平成20年度、工芸品の事前調査はチェコ外務省、チェコ国立美術館、国立ナーブルステク博物館、デンマーク国立博物館などヨーロッパで8館21点の調査を行った。また、海外での修復アトリエに使用しているケルン東洋美術館では漆工品修復について、ドイツ技術博物館では絵画修復についてワークショップを開催した。また、平成19年度に修復した絵画、工芸品の修理状況をまとめて「在外日本古美術品保存修復協力事業」の報告書を刊行した。なお本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団より助成を受けた。

報告書の刊行 1件

・『在外日本古美術品保存修復協力事業修理報告書 平成20年度(絵画/工芸品)』 235p 東京文化財研究所 09.3

研究組織

○川野邊渉、中山俊介、北野信彦、加藤雅人(以上、保存修復科学センター)、北出猛夫、後藤嘉信、高橋直久(以上、管理部)、中野照男(副所長)、田中淳、津田徹英、勝木言一郎、塩谷純、綿田稔、皿井舞、江村知子、土屋貴裕、城野誠治、鳥光美佳子(以上、企画情報部)、清水真一(以上、文化遺産国際協力センター)

文化財保存施策の国際的研究 (②セ01-08-3/5)

本プロジェクトは、文化財の保存のための諸施策またこれに関する国際協力を円滑に進めるための基礎となる国際情報の収集・研究、基盤づくりを大きな目的とし、これを政策面における文化財保護制度の比較研究（諸外国の文化財保護制度の研究）、情報交換・ネットワークづくりのための国際ワークショップの開催の二つの側面から展開している。

諸外国の文化財保護制度の研究

目 的

諸外国また国際社会における文化遺産の概念やその保護の理念、政策、各種施策に関する最新の動向を常に把握し、分析し、情報を蓄積しておくことは、国内の文化財保護施策のさらなる充実に資するためにも、また日本が行う文化遺産分野での国際協力事業をさらにレベルアップして実りある国際貢献を実現していくためにも重要である。本研究は、そのための諸外国また国際機関の特に政策・施策レベルの動向に関する比較研究を行うものである。

概 要

今年度は、世界各地で開催された研究会やワークショップに積極的に参加し、文化財の保存に関わる各種の情報を収集し、分析した。主なものは以下である。シルクロードの世界遺産一括登録に関するユネスコ作業部会（西安）、ユネスコ世界遺産委員会（ケベック）、タンロン皇城遺跡の保存に関するワークショップ（ハノイ）、東アジア木造建造物の彩色・塗装の保存に関する国際セミナー（北京）。

国際文化財保存修復研究会

日本国内への国際情報の発信と、国際協力に関する国内専門家の情報交換・連携強化を目的として、本年度は「遺跡保存と水」をテーマに開催して国際文化財保存修復研究会を開催した。（日時：2008（平成20）年9月19日、場所：東京文化財研究所セミナー室）。同研究会の報告書として『第22回国際文化財保存修復研究会報告書』を作成した（70頁を参照）。

アジア文化遺産国際会議

目 的

文化遺産の保存またその国際協力において、専門家や専門機関の相互の連携は、情報の共有、保存の理念の深化、施策や技術の向上、緊急の問題の解決のために重要である。アジア文化遺産国際会議は、アジアの文化遺産に関する各種の課題について協議するため、各国の専門家また専門機関を招聘して行う国際専門家会議であり、アジア地域における文化遺産保存活動の普及啓発、専門家・専門機関ネットワークの構築に貢献するとともに、アジアから世界に向けての情報発信の場となることを目指している。

概 要

文化遺産国際協力センターではこれまでアジアの専門家を日本に招聘して国際会議を開催することにより標記の目的を達成し、成果をあげてきた。この経験をもとに2006（平成18）～2010（平成22）年度の5カ年計画では、会議の開催場所を海外に移してこれを地域ごとに開催することにより、これまでに蓄積されて

きた経験を生かしつつより現実に即した情報の収集と問題点の解決を目指している。

この計画の初年度（2006年度）の会議は準備会合として東京で開催され、2年目（2007年度）は、中央アジアのウズベキスタン共和国タシケント市で開催した。3年目の本年度は、2009（平成21）年1月14～16日の間、タイ王国のバンコク及びアユタヤにて東南アジアを中心とする会議を開催した。14、15日の2日間はバンコクにて円卓会議とし、16日はアユタヤにてエクスカージョンとした。

東南アジア諸国は、高温で多湿であるなど、気候的共通性があるが、その中で文化財に対して影響を与える自然災害にはどのようなものがあるか。そして、そのような自然災害により被災した遺跡を修復していく際に、どのような方法がとられているかなどに関するカントリーレポートが各国からなされ、それに関する総合討議が行われた。また、アユタヤ遺跡において、実際に自然災害に対する対策が取られている遺跡の現場を参加者で視察し、適切な修復材料などに関する情報が共有された。

日 時：2009（平成21）年1月14～15日（バンコク、サイアムシティホテル）、16日（アユタヤ）

テーマ：被災後の遺跡の修復と保存

主 催：東京文化財研究所、タイ文化省芸術総局

後 援：東南アジア文部大臣機構考古芸術事業、在タイ日本国大使館

発表者と発表テーマ：

趣旨説明・基調講演：朽津信明、清水真一（以上、文化遺産国際協力センター）

カントリーレポート：グトモ・シダールタ（インドネシア）、ヤハヤ・アーマド（マレーシア）

ワイルウィン（ミャンマー）、マリア・クリスティーナ・ヴァレラ（フィリピン）

ストウチャイ・パンスワン（タイ）、フォン・ヴォダン（ベトナム）、二神葉子（日本）

会議資料出版：2冊

『Expert Meeting on Cultural Heritage in Asia and the Pacific』 09.01

『Reference Materials—Natural disasters, Immovable Cultural Heritage and Emergency Actions in Southeast Asia』 09.1

研究組織

○清水真一、岡田健、山内和也、朽津信明、二神葉子、友田正彦、江草宣友、廣野幸、高多加奈子、今井健一朗、宇野朋子、有村誠、影山悦子、秋枝ユミイザベル、邊牟木尚美、島津美子、鈴木環（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、ウーゴ・ミズコ（以上、客員研究員）



アジア文化遺産国際会議発表風景

アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 (②セ02-08-3/5)

目 的

アジア諸国では、煉瓦、土、石など、各地の遺跡に共通して用いられている材料が認められる。本研究では、地域で区切って研究を行うのではなく、各文化財に共通して用いられている素材を調査・研究することから、その素材で形作られた多くの文化財の保存修復に寄与することを目的とする。具体的には、材料の物性とその劣化に関する基礎的な研究を行うことから、それぞれの材料が劣化しにくい条件を考察し、材料に対して、あるいは遺跡の環境に対して、材料劣化を起こしにくい条件を与えることで、文化財の保存修復に貢献する。

成 果

石材の表面に微生物が繁茂することを避ける目的で、石材表面に撥水剤が塗布される形で保存対策が取られる場合が少なくないが、過去にそうした撥水处理が施された文化財について、その後の状況を詳細に調べることから、撥水处理の効果と弊害について検討した。その結果、直接雨の影響がない部分では、処理後20年が経過しても引き続き効果が持続し、微生物繁茂が起きていないのに対して、表面に凹凸があり、日射が乏しく水分蒸発が乏しい部位では、たとえ撥水効果は持続していても、石材に染み込めない水の影響でかえって微生物繁茂が促進されている状況が明らかにされた。これは、撥水处理を行うためには、部位の環境条件を十分に理解し、適切な環境において実行される必要があることを示している。

こうした基礎研究を受けて、タイ・スコタイ遺跡においては、具体的にどのような環境であれば撥水处理の効果が得られ、どのような環境であればかえって弊害が引き起こされるかについて現地調査を進めた。具体的には、遺跡周辺の温度・湿度・風速・風向・日射などの各種環境データを計測するとともに、微生物が繁茂している部位としていない部位とにおける蒸発量の違いを計測し、現実に撥水効果が得られやすい環境条件と弊害を起こし得る環境条件とについて解析した。また、カンボジア・アンコール遺跡群のタ・ネイ遺跡において、砂岩の試料を多数作成し、その強度や帯磁率に関する初期条件を計測した後、微生物が繁茂しやすいと想定される環境としにくいと想定される環境とにそれぞれを設置し、その後の変化を調べる実験を開始した。試料の中には既に微生物が繁茂し始めたものもあり、そうしたものでは強度低下が観察され始めている。こうした解析が、遺跡で今後適切に生物繁茂を軽減していく方向を検討することに貢献すると期待される。

報告書出版 1冊：『アジア諸国における文化遺産を形作る素材の劣化と保存に関する調査・研究 平成20年度成果報告書』09.3

論文掲載数 2件：朽津信明・二神葉子「飯田市・文永寺石室五輪塔における蘚苔類の繁茂について」『保存科学』48 pp.33-42 09.3、朽津信明「いわゆる「宋風獅子」の岩質について」『考古学と自然科学』58 pp.1-11 09.1

発表件数 3件：朽津信明「表面に微生物が繁茂する石材の表面風化状況について」日本応用地質学会平成20年度研究発表会 横浜市開港記念会館 08.10.30, 31、朽津信明・二神葉子「飯田市・文永寺石室五輪塔における蘚苔類の繁茂について」日本文化財科学会第25回大会 鹿児島国際大学 08.6.14, 15、川本伸一・鉾井修一・小椋大輔・宇野朋子「スコタイ遺跡における仏像の保存に関する研究 周辺気象の計測と藻の繁茂状況」日本建築学会大会 08.9

研究組織

○朽津信明、清水真一、二神葉子、宇野朋子（以上、文化遺産国際協力センター）、鉾井修一（客員研究員）

龍門石窟の保存修復に関する調査研究 陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 (②セ03-08-3/3)

龍門石窟の保存修復に関する調査研究

目 的

中国龍門石窟の保存に協力するため、龍門石窟研究院との緊密なパートナーシップを構築し、龍門石窟の現状を詳細に調査し、保存修復の方法についての研究と具体的な処置、人材の養成など、多角的で実効的な成果をあげようとするのが、本研究の目的である。平成13年度からの5カ年中長期計画に引き続き、平成18年度からの3年間で実施する。

成 果

(1) 専門家派遣

7月14日～17日の日程で、津田豊氏（(株)ジオレスト）と岡田健が龍門石窟へ赴き、龍門石窟の保護に関して、環境、修復技術、管理運営等の各項目を現地で精査し、龍門石窟研究院及び同石窟で実施中のユネスコ/日本信託基金龍門石窟保護修復プロジェクトにおいて修復作業の設計等を担当している中国文化遺産研究院等に対して、指導助言を行った。

(2) 活動紹介パンフレット『世界遺産・龍門石窟保護のための国際協力—その足跡と成果—』の編集・発行

平成12（2000）年以来実施し、平成20年度をもって終了する中国・龍門石窟の保護のための各種協力事業について、同年9月から東文研エントランスホールでパネル展示による紹介を行った（企画情報部担当）のを機会に、その内容を印刷物に作り、関係機関へ配布するとともに、玄関等に設置して来訪者に自由に取っていただけるようにした。A4版、カラー、8ページ。

[目次]

はじめに

1. 龍門石窟の概要と保護
2. 国際協力の発端
3. ユネスコ/日本信託基金龍門石窟保護修復プロジェクト
4. 人材育成
5. 写真撮影と画像データ管理システム構築のための共同研究
6. 東文研所蔵龍門石窟拓本資料

研究組織

○岡田健、杉崎佐保恵（以上、文化遺産国際協力センター）

龍門石窟の保存修復に関する調査研究 陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究 (②セ03-08-3/3)

陝西省唐代陵墓石彫像の保存修理に関する調査研究

目 的

東京文化財研究所は財団法人文化財保護・芸術研究助成財団と陝西省文物局の合意により平成16年度から実施されている陝西唐代陵墓石彫像保護修理事業を西安文物保護修復センターと共同で運営実施している。

この事業に関連して、唐時代の乾陵、橋陵、順陵に附属する石彫像の保存修理に関して、科学的研究と保存修理作業を行うと共に、石彫像保存地区の保存計画策定の研究を行う。

成 果

(1) 石造文化財の保存に関するシンポジウム

陝西省唐代陵墓石彫像保護修復事業と本プロジェクトが本年度で終了するにあたり、11月17日、18日の日程で、西安市において「石造文化財の保存に関するシンポジウム」を開催し、その成果を中国各機関・大学等の専門家に披露するとともに、各種の問題について意見交換と交流を図った。

主 催：西安文物保護修復センター／東京文化財研究所

参加者：中国国内の石造文化財の保存に携わる専門家 約30名／日本側参加者 4名

研究会内容

森井順之（東文研） 九州臼杵摩崖石仏覆い屋建造後の環境観測

友田正彦（東文研） 石造遺跡の保存管理—アンコール遺跡群の場合—

津田豊（(株)ジオレスト：UNESCO龍門プロジェクト専門家） 龍門石窟の結露現象

方雲（中国地質大学・武漢） 順陵石刻の亀裂変形観測

甄広全（西安文物保護修復センター） 石質保護材料研究

朱一清（中衛康隆ナノ科技發展公司） 石質文物保護材料とその評価体系

万俐（南京博物院） 江蘇句容貌山華陽洞摩崖題刻の保護

馬濤（西安文物保護修復センター） 乾陵石刻の表面保護処理

(2) 報告書の作成

各年の成果をまとめた報告書「日中共同唐代陵墓石彫像保護修復プロジェクト—その経緯と成果—」を作成した。（⑥刊行物に関する事業一覧を参照）

研究組織

○岡田健、杉崎佐保恵（以上、文化遺産国際協力センター）

敦煌壁画の保護に関する共同研究 (②セ04-08-3/5)

目 的

本研究は敦煌壁画に関して、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で調査研究を行うものである。日中共同研究の第5期（5年間）にあたる今期は、壁画の製作材料と製作技法を解明することを目的とし、各種の可搬型機器を用いた光学および理化学的分析調査とともに、壁画の保存状態の確認を行い、壁画に用いられた材料や技法と劣化の状態を関連づけ、それから考え出される可能性を確認するため、新たな調査を加えるなど、研究自体が段階的に発展してきている。さらに14C年代測定による洞窟の年代同定とそれをもとにした壁画の比較研究を行うなど、敦煌壁画に関する包括的な研究を実現しつつある。

成 果

- (1) 第5次合同調査：2008（平成20）年6月1日～6月29日の日程で、第285窟北壁の技法調査を進めるための写真撮影による光学調査、北壁、東壁での保存状態記録作業、14C年代測定研究のための試料採取作業を実施した。
- (2) 第6次合同調査：9月6日～10月19日の日程で、鉛同位対比分析研究に関連する各窟壁画確認作業、デジタル顕微鏡、蛍光X線、分光光度計を用いた第285窟壁画に対する非接触分析調査、3Dレーザースキャナーを用いた第285窟内空間の座標及び画像データ取得作業、北壁・東壁の銘文についての調査を実施した。
- (3) 補充調査：2月21日～25日の日程で、第285窟調査データによる文化財アーカイブ構築のためのミーティングと敦煌研究院保有の第285窟関連データに関する調査、2008年度報告書作成に向けての補充調査を実施した。
- (4) 文化財アーカイブ構築：本研究においては、すでに膨大なデータが蓄積されつつある。このデータを管理し、今後の壁画研究と保護に活用するため、文化財アーカイブを構築し、その成果を示すことにした。その方法として、地理情報システム（GIS）を採用することにし、同志社大学文化情報学部との共同研究契約を結び、研究を開始した。
- (5) 放射性炭素年代測定法による研究：名古屋大学年代測定総合研究センターに委託し、洞窟の年代同定に関する研究を平成18年度から継続実施している。
- (6) 敦煌派遣研修：6月1日～10月19日の日程で、日本から公募によって選抜した若手研究者2名を敦煌に派遣し、壁画を中心とする文化遺産保護について研修を受けさせた。
- (7) 敦煌研究員の来日研修：1月22日～3月14日の日程で、敦煌研究院保護研究所から、郭青林研究員・柴勃隆研究員の2名が来日し、研究・研修を実施した。郭研究員は、2006年度に続き2度目の来日で、名古屋大学年代測定センターにおいて中村俊夫同センター長の指導のもと、2008（平成20）年度採取した試料を持参し、試料作成の作業を行い、そのデータをもとに分析研究を行った。柴研究員は、東文研において共同研究で収集した保存状態に関するデータのうち西壁の物理的損傷に関する位置情報と幾何情報をデジタル化する作業を行い、これをもとにGISを活用した分析研究を行った。
- (8) 報告書の作成：2008（平成20）年度の成果をまとめ、東京文化財研究所と敦煌研究院両者共同の成果報告書を編集し、発行した。

研究組織

○岡田健、山内和也、宇野朋子（以上、文化遺産国際協力センター）、高林弘実（客員研究員）、石崎武志（保存修復科学センター）

西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業 (②セ05-08-3/5)

2. イラク

イラク人専門家の人材を育成し、イラク人による文化財復興を支援する。本事業は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「バグダードにあるイラク国立博物館の保存修復室復興事業」と連携して実施した。

2-1. イラク文化財専門家研修事業

イラク国立博物館より2名（ユネスコ日本信託基金による招へい）の保存修復家を招へいし、7月1日から12月10日の約半年間にわたり、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、静岡県埋蔵文化財調査研究所、九州国立博物館で、木製品をはじめとして金属製品などの考古遺物の保存修復に関連する研修を行った。

3. 西アジア周辺諸国における文化遺産保護に関する調査・研究等

3-1. タジキスタン

(1) タジキスタン国立古物博物館が所蔵する壁画片の保存修復：2007（平成19）年度に締結したタジキスタン共和国科学アカデミーの歴史・考古・民族学研究所と文化遺産の保護に関する合意書に基づき、文化庁委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業と連携してタジキスタン国立古物博物館が所蔵する壁画片の保存修復及びタジク人文化財専門家の人材育成・技術移転を行った。

(2) アジナ・テパ仏教寺院の保存修復：ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタンの仏教遺跡保護プロジェクト」と連携し、遺跡の保存修復に関わるクリーニング及び考古学調査を実施した。

3-2. インド

(1) アジャンター壁画の保存修復：文化庁委託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業と連携して、インドのアジャンター仏教壁画の保存修復活動を開始した。11月21日に、インド考古局デリー本部において、東京文化財研究所とインド考古局との共同調査に関する合意書を締結し、2009（平成21）年2月に、第1次ミッションを派遣し、壁画の保存修復に向けた調査を実施した。

3-3. 国際会議等への参加

「UNESCO Sub-regional Workshop on Serial Nomination for Central Asian Petroglyph Sites」（2008年5月27日～31日、於ピシュケク、キルギスタン、出席者：山内和也）、「UNESCO Sub-regional Workshop on the Serial World Heritage Nomination of the Silk Roads」（2008年6月2日～5日、於西安、中国、出席者：山内和也、前田耕作）

研究組織

○清水真一、山内和也、朽津信明、宇野朋子、有村誠、影山悦子、島津美子、邊牟木尚美、鈴木環（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、岩井俊平、西山伸一、谷口陽子（以上、客員研究員）、小林謙一、井上和人、窪寺茂、森本晋、石村智、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、中村俊夫（名古屋大学）、佐々木達夫（金沢大学）、木口裕史（株式会社パスコ）、島馨（応用地質株式会社）

諸外国の文化財保存修復専門家養成 (②セ06-08-3/5)

目 的

国内で混乱が続くイラクやアフガニスタン、また文化財の保存に対しては発展段階にあるアジア諸国においては、文化財の保存修復専門家が決定的に不足しており、その養成が緊急の課題となっている。

文化遺産国際協力センターでは、アジア諸国での文化財の保存修復を担う保存修復専門家の人材育成のための事業を進めている。研修には、経験豊かな保存修復専門家の関与が必要であり、同時に専門家養成のための基本となる教材や方法を整備し、普及させてゆく必要がある。

本事業では、アジア諸国における文化財保存のための人材養成に貢献することを目的として、文化財保存修復の専門家を育成するための研修の実施と並行して、研修のための資料の作成を行っている。

成 果

本年度は、文化財の保存修復の研修に活用するための教材として、水浸木材の保存修復（現場での取り上げから保存修復まで）に関するテキストと紹介ビデオを作成した。

水浸木材の保存修復用のビデオでは、脆弱な水浸木材の発掘現場での取り上げ方法を紹介し、適切な保存管理、保存修復、展示までの一連の過程について分かりやすく紹介している。また、ビデオで紹介できなかった材料や薬品などについては、テキストに詳しく記載した。テキストとビデオを併せて利用することで、水浸木材の保存修復について概観できるようにこころがけた。

このDVDは、日本と同様に湿潤の土壤をもつ東南アジアの遺跡発掘現場での保存修復研修に役立てる予定である。「水浸木材の保存修復」DVDの作成においては、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の協力を得た。

- ・『水浸木材の保存修復』DVDビデオ 東京文化財研究所 09.03
- ・『水浸木材の保存修復』テキスト日本語版 東京文化財研究所 09.3
- ・『水浸木材の保存修復』テキスト英語版 東京文化財研究所 09.3

研究組織

○清水真一、朽津信明、宇野朋子、廣野幸（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫（サイバー大学）、西尾太加二（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）

